

令和元年6月22日現在

機関番号：32683

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15H03162

研究課題名(和文) 宗教思想研究の基礎概念再考 mysticism及び関連概念の理論的・系譜学的研究

研究課題名(英文) Reconsidering elementary concepts for the study of religious thoughts: A theoretical and genealogical study of 'mysticism' and its relevant concepts

研究代表者

久保田 浩 (KUBOTA, Hiroshi)

明治学院大学・国際学部・教授

研究者番号：60434205

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,100,000円

研究成果の概要(和文)：1960年代以降の宗教研究において展開してきた概念史的・系譜学的自己反省を踏まえ、本研究は宗教思想研究において伝統的に使用されてきた諸概念(「神秘主義」と訳されるmysticismおよびそれに関連する諸概念)の成立ならびに確立の歴史をたどり、それらが、ある特定の現象を記述し、分析する目的のために「学問的」に作られた術語であるよりも、17世紀以来のヨーロッパ宗教史・文化史的文脈の中で生まれ、かつ学問的概念としても彫琢されていったものであることを明らかにした。それは同時に、通常、非宗教的であると特徴づけられる「近代」における「学問」が帯びる宗教性と、「宗教」が帯びる学問性との関連をも物語っている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で考察した関連諸概念の歴史的形成は、一方で制度化しつつある学問的宗教研究と、他方で宗教思想・運動の双方が、いまだ明確に相互に分化していない歴史的・地域的狀況で進行してきた。この知見は、現在の宗教研究者が、宗教言説と学問言説との関係を改めて批判的に検討するための出発点となる。まず、従来考察の対象とはされてこなかった宗教思想研究における諸概念を批判的に検討することを通して、今後の宗教研究の理論形成を考える際の基本的視座を例示した。また、ヨーロッパ近代ならびにそれを受容した日本近代における、宗教と学問との関係を再考するための方法的な洞察を提供することもできた。

研究成果の概要(英文)：Based upon self-reflective considerations from the perspectives of conceptual history and genealogy that have been made in religious studies since the 1960's, the present research has attempted to trace certain concepts traditionally used in scholarly studies on religious thoughts (especially 'mysticism' and its relevant concepts) back to discursive contexts of their emergence, with the result of the recognition that they have been located in the midst of European religio-cultural history since the 17th century, rather than being a term elaborated for the purpose of scholarly describing and analyzing certain phenomena. Simultaneously, this recognition also illustrates the relationship between religious features of 'academe' and academic features of 'religion', especially in 'modernity' often supposed to be secular.

研究分野：近現代ドイツ宗教史・宗教思想史

キーワード：宗教思想 宗教理論 系譜学 概念史 近代 宗教概念論 宗教学

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

1980年代後半からポスト・モダンならびにポスト・コロナル批評の潮流に触発されて展開してきた宗教学の自己批判的反省は、宗教学が用いてきた諸々の宗教理論ならびに諸概念が内包するイデオロギー性と、とりわけ religion 概念の歴史的構築性を明るみに出してきた。同時に、宗教学の制度化の歴史への批判的視座から学問制度史的・精神史的文脈における学問史研究が進展し、また宗教研究の理論構築における民族主義的・人種主義的・宗教的イデオロギー性も問われてきた。

欧米において展開したこうした自己批判的な学問史・概念史研究の視点は、本研究の代表者と分担者の間で共有され、すでに一定の研究成果が蓄積されていた。そうした研究成果において、表現は異なりながらも繰り返し立てられていた問いの一つは、宗教学の創成期において、近代的学問言説と近代的宗教言説とが未分化の状態にあったのではないかというものであった。そうした問いに導かれ、以下の「研究の目的」で述べるような、記述・分析のために宗教学が産出してきた概念装置と、宗教学が対象とする過去と同時代のイーミックな言説(宗教言説)との、相互補完的・相互形成的な関係への問いが生まれてきた。

2. 研究の目的

1980年代後半から、宗教学において従来使用されてきた基本的概念の再検討の機運が高まり、とりわけ religion 概念の構築性への自己批判的反省がなされてきた。本研究は、こうした学問的な概念の再検討の議論と成果を踏まえた上で、近代において成立した宗教学が生み出してきた諸概念のうちで、心霊、霊性、叡智、体験等を重要な構成要素とする宗教思想・思想運動を記述・分析する際に用いられてきた mysticism およびその関連諸概念(esotericism、occultism、spiritualism)に着目し、それらの成立・普及・定着を概念的・系譜学的かつ知識社会学的に検討し、宗教的概念と学問的概念との間の歴史的相互形成過程を明らかにすることを目的として設定した。

3. 研究の方法

以上の研究目的を追求するために、研究の内容を(1)近世以前・以後の mysticism を中心とした諸概念の系譜学的・概念的・知識社会学的研究、(2)宗教思想・思想運動研究における概念形成に関する理論的研究、の二つに大別し、前者については、一次資料の検討と近年刊行された研究文献の精査に基づく個別研究を、後者については、そうした事例研究を素材とする比較検討に基づく体系的な理論的考察を遂行した。同時に、(3)国際的なワークショップや国内の学会・研究会等、本研究プロジェクトの内外で、研究成果の検証を図った。以下これらの点について簡潔に紹介する。

(1)と(2)の個別研究と比較的理論研究は、知識社会学的研究(文化制度を含む社会構造の地域的差異や時代的変動と連動する、「意味」の構成と変容の過程を解明する)、概念的・系譜学的研究(学問制度による言説の生産と、そこから排除された、あるいはそこに取り込まれた宗教言説の生産との関係を解明する)という二つの方法論的視座から遂行された。その際、各概念や各地域・言語の個別研究をまず行い、それを集約するというよりはむしろ、こうした方法論的視座を共有したうえで各個別研究に向かい、それらを対照させてさらに理論化を図るという工程をたどった。その際、各自の分担に応じて、海外研究協力者の協力を仰ぎながら現地で行う資料調査に重きを置いた。

(3)の比較的・理論的検証作業の中心となったのは、本研究プロジェクト内部の定期的研究会(年に二回開催)および小規模の勉強会、そして研究期間中に2回開催した国際シンポジウムである。そこでは、狭義の宗教研究に限定することなく、近代において<宗教思想の言葉>が展開していったより幅広い文脈を考察の射程に収めるために、自覚的に学際的なアプローチを採用した。同時に本研究課題の成果を随時、国際学会等で公表し、批判を仰いだ。

4. 研究成果

(1) 主な成果

本研究課題にかかわる研究会等では、個別研究の発表(以下で簡単に紹介する)とそれに基づく比較的・理論的研究(その詳細は後段の「(3)今後の展望」で言及する)が遂行された。まず出発点として、宗教思想の歴史的再検討のための方法論的諸問題を確認したのち、「神秘主義」概念に特化して、西洋精神史・宗教史・文化史におけるその系譜学的分析を全研究期間をとおして繰り返し行った(具体的には、マイスター・エックハルトと<近代的>概念としての「神秘主義」の相関関係、体験主義的に捉えられがちな「神秘主義」概念の再検討、「古典的宗教学」におけるプロテスタント自由主義的な「神秘主義」理解、20世紀以降に学問的概念として定着した「神秘主義」が帯びる宗教思想形成を促す機能等について)。他の学問分野との関連については、宗教・宗教思想研究・哲学との歴史的結びつきを、W・ジェームズの哲学研究における「神秘主義」の位置づけを糸口を探っていった。宗教知の生産に関する宗教史的・文化史的・思想史的な文脈の検討に関しては、近代ドイツの「美的モデルネ」と「民族主義宗教」を「スピリチュアリティ」の文脈で分析し、また「スピリチュアリズム」を巡る宗教的かつ学問的議論の中における「神秘主義」「アニミズム」等の近代的使用を確認した。さらに、日独比較の観点から、文化的ネイティヴィズム・文化的本質主義と「神秘主義」との思想的関連についても検討した。宗教

(学)言説の政治思想的文脈については、近代スウェーデンにおけるナショナル・アイデンティティと神秘主義との関連、同時期のドイツにおける民族主義宗教と神秘主義の関連、第一次大戦後のドイツにおけるアナキズムと神秘思想との関連をとおして、「世俗的」政治思想の宗教思想性を明らかにした。

本研究課題を遂行する過程で企画・実施された国際研究協力の成果としては以下を挙げることができる。国際宗教学宗教学会議(2015年、カナダ・トロント大学)において、近代における宗教知と学問知の形成における相関関係をテーマとするパネル("Intellektuellenreligion" Reconsidered: Systems, Adaptions and Recent Trajectories)で本研究課題の問題提起と問題関心を提示した。さらに、地域比較研究(特に日独)の視座から本研究課題の理論的・方法論的枠組みを捉え直すことを目的に、"Nationale Kulturen – Nationalkulturen. Japanische und Deutsche Perspektiven im internationalen Kontext"という主題で国際シンポジウムを二回開催した(2015年、ドイツ・テュービンゲン大学。2019年、立教大学)。また、より小規模で、個別研究のトピックの調査を推進する目的で、国際シンポジウムを三回開催した(現在のヨーロッパの宗教事情とキリスト教研究との相関、2017年度。韓国における「神秘主義」概念の受容史・研究史、2017年度。英国の無神論運動と宗教研究の関連、2018年度)。

(2) 成果の国内外における位置づけとインパクト

国内外における従来の宗教研究において、「宗教」概念の構築的性格等への言及はあったが、それを具体的に近代の社会的・文化的文脈の中において、しかもミクロな観点から具体的な事例に即して跡付ける作業が十分に行われていたとは言いがたい。その意味において、本研究課題の成果は以下の二点において、従来の宗教研究の自己理解を再検討するための一契機となりうるとともに、宗教史・宗教思想史研究の新たな対象領域を確定する第一歩となっている。

通俗的で平板な「近代」理解に基づく「宗教学」理解の相対化。本研究は、19世紀から20世紀初頭にかけて近代科学・学問言説が生成し確立していく過程において、近代的宗教(これは学問化した宗教でもある)として当時現れてきた諸現象(例えば「スピリチュアリズム」)と学問的宗教研究との間に、概念的相互形成の痕跡を確認した。換言すれば、一方で、こうした

近代的宗教現象が、「内に隠されて」(esotericos, occulto, musticos)ありながらも、過去から連綿と続く知的・学問的伝統であると自らを表象する実践(ゆえに、esotericism, occultism, mysticismといった自己表象実践)があり、他方、確立しつつある学問的宗教研究の立場からは、自らと競合するこれらの諸現象を宗教現象として、まさにこれらの諸概念によって名づけようとする実践があった。

従来の概念批判の内容と範囲に対する批判。宗教研究における諸概念の<定義>の妥当性を巡る議論は、狭義の学説史(ディシプリンとしての宗教学の存在を前提とし、諸概念の<定義>の妥当性の向上の模索を、学問自体の内在的な方法論的・理論的展開として捉える)の域を出ていなかった。加えて、今日に至るまでこのような形で論じられてきた諸概念の多くは、特に人類学・社会学の文脈でその妥当性が問われてきた。しかし、こうした趨勢の傍らで、mysticismをはじめとする諸概念によって特徴づけられてきた諸現象を、テキスト解釈に基づき解明しようとする宗教思想・思想運動研究はこれまで、これらの概念性を学説史的な意味においてさえも問い直してこなかった。したがって、宗教思想研究で自明のものとして使用されてきた諸概念の歴史的成立と展開、具体的には英・仏・独・伊・西諸言語圏での概念形成の過程を詳細に検討した本研究は、それらの概念に妥当性が与えられていった社会的・文化的・宗教的・学問的要請を明るみに出しており、学問的概念としてのそれらの限界と可能性とを解明するための試論となっている。

(3) 今後の展望

本研究課題においては、個別研究に基づく比較的・理論的研究が目指されてきたわけであるが、それは必ずしも「宗教思想研究」を体系的かつ網羅的に通覧し、その成立の歴史的経緯の解明に基づく、<理論>の提示を目的とするものではなかった。本研究が終了した現時点においても、研究代表者と分担者は、そうした<宗教理論>の提示を目指しているわけではない、という点において見解を一にしている。それは本研究課題が当初から定めていた到達地点が、<宗教思想>の再構成・再叙述でも<宗教理論>の提示でもなく、思想や理論がその都度の社会内的諸セクター(宗教、学問、文化等々)との解き難い連関の中にあることを認識し、そしてその連関が具体的にどのような姿を呈しているのかを個別に解明することであったことと密接に関連している。そして研究期間が終了した時点において改めて本研究課題に反省的なまなざしを向けてみてわかることは、mysticismおよびその関連概念に焦点が定められたのは、単にそれらが宗教思想研究の「基礎概念」であるという理由からだけではなく、否、それよりはむしろ、<宗教思想>に(学問的・宗教的に)取り組む<近代的>営みそのものの特殊性(と場合によっては<近代的>制約)を明らかにしようとしていたからであったことがわかる。

したがって、すでに研究期間中に『宗教理論事典』が構想されたことは、本研究課題の中に(当初はおぼろげであったとしても)内在していたテーマが自覚化されたことを示唆している。この構想は、宗教思想研究において特徴的な諸概念を提出してきた諸理論家とその理論を、<近代>という時代を再考しつつ捉え直し、宗教思想研究の単なる学説史叙述としてではなく、<近代の宗教研究>の宗教性、<近代の宗教>の学問性という観点から描き直すことを将来的課題として設定した。その意味で本課題研究は、「1. 研究開始当初の背景」で略述した、研究代表者・分担者のこれまでの宗教学史に関する研究(とりわけ、2009年度以降に代表者・分担者が代表者とな

って遂行してきた共同研究である、科研費 21320018 (久保田)、23320015 (深澤)、16K02176 (江川) 等) から必然的に導出された問題意識と方法論、並びに理論的考察の成果であるとともに、上述したような意味で、<宗教理論> (これは、本課題研究の観点から表現しなせば、近世から近代にかけて生み出されてきた宗教と学問の自己反省行為によって生み出されてきた<宗教思想>ということにもなる) の研究へと展開することも同様に必然的な道筋である。換言すれば、「宗教」の語りの近代性に関する反省をさらに促すと同時に、近代とともに誕生した宗教研究の同時代的文脈に着目することにより、それらを踏まえた上での宗教思想研究の将来的構築へと進んでいくこととなる。

<宗教理論>のこうした批判的検討は、本研究課題においては萌芽的にしか見られなかった、学際的研究を要請するものでもあり、具体的には、歴史学、哲学・思想史、社会学、人類学、民俗学、心理学等の分野で行われてきた、「宗教」という事象についての理論化を、その成立・展開・受容にかかわる思想史的な文脈において検討し、さらに特定の宗教的伝統の自己反省から生まれた理論化も考慮することとなる。<近代>を地域的・領域的に縦横に越境する、いわば<時代研究>とも言えるこの広範なプロジェクトは、従来の宗教研究、とりわけ宗教思想研究が陥った隘路 (実証的研究と思想的な研究との分断、宗教思想研究自身の思想史的な文脈に対する自覚の希薄化、他の人文社会科学の研究分野との没交渉等) を見定め、それを越えた新たなトランスディシプリナリな研究へと道を開いてくれるものと考えられる。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 39 件)

Ryozo Maeda, "Sprache, Mythos und Analogie. Zum Ähnlichkeitsdenken bei Walter Benjamin und Ernst Cassirer", *Neue Beiträge zur Germanistik*, 17/1, 2018, pp. 7-14. (査読有)

渡辺優 「「パロール」とそのゆくえ ミシェル・ド・セルトーにおける宗教言語論の輪郭」『天理大学学報』(70/1)、2018年、1-28頁。(査読有)

堀雅彦 「デュルケームのプラグマティズム理解」『北大宗教学年報』(1)、2018年、17-25頁。(査読無、<http://doi.org/10.14943/85640>)

久保田浩 「「宗教学と神学」を改めて考える」『宗教研究』(91 巻別冊)、2018年、28-31頁。(査読無)

鶴岡賀雄 「近代日本の大学における宗教研究の特徴 制度論的観点から」『宗教研究』(91 巻別冊)、2018年、19-25頁。(査読無)

阿部善彦 「貧しさは所有の放棄か エックハルトの「ドイツ語説教 74」を手がかりに」『西洋中世研究』(9)、2017年、8-26頁。(査読無)

久保田浩 「宗教史叙述とは何か ティーレ宗教学の宗教史的な文脈を手掛かりに」『宗教学年報』(34)、2017年、25-43頁。(査読有)

鶴岡賀雄 「「神秘主義」概念の歴史と現状」『宗教学年報』(34)、2017年、1-24頁。(査読有)

阿部善彦 「エックハルトにおける「一」 "unum, ut iam saepe dictum est, appropriator patri" (In Io, n. 549)」『パトリスティカ』(20)、2017年、87-104頁。(査読有)

鶴岡賀雄 「アピラのテレジアにおける「女性と共生」」『共生学』(10)、2015年、84-106頁。(査読無)

前田良三 「キルヒャーと可視性のメディア メディア文化史的注記」『19世紀学研究』(9)、2015年、73-92頁。(査読無)

阿部善彦 「septem stellae lucidae ブリクセン司教時代の「説教 176」から見るクザーヌス像」『キリスト教学』(57)、2015年、25-51頁。(査読有)

[学会発表] (計 55 件)

深澤英隆 「「芸術宗教」から「宗教芸術」へ ドイツ民族主義宗教運動における美学的なもの」第2回国際ワークショップ「諸 国民文化 - 国際的文脈における日独の視点」、2019年。

久保田浩 「1920・30年代の「オーデン」表象と「アトランティス・北方的」ユートピア 宗教とナショナル・アイデンティティとの関係を巡って」第2回国際ワークショップ「諸 国民文化 - 国際的文脈における日独の視点」、2019年。

久保田浩 「0・プフライダーにおける「宗教史学」と「宗教哲学」との関係を巡って」研究会「宗教学の生成期における哲学の位置」、2019年。

齋藤正樹 「帝政期ドイツの民族主義と宗教史叙述 民族主義 (フェルキッシュ) の潮流を例として」第2回国際ワークショップ「諸 国民文化 - 国際的文脈における日独の視点」、2019年。

久保田浩 「「宗教学と神学」を改めて考える」、日本宗教学会、2017年。

深澤英隆 「表象しえぬ古代の表象 ドイツ・プレファシズム期における視覚文化」、日本宗教学会、2017年。

江川純一 「イタリア宗教史学派はデュルケームをいかに読んだか？」、日本宗教学会、2017年。

渡辺優 「中世から近世にかけての西欧における神秘思想の変容」、日本宗教学会、2017年。

Hiroshi Kubota, "Die religionswissenschaftliche 'Medialisierung' der 'Religionsgeschichte', Interpretation nach der 'digitalen Wende'. Internationales Symposium des SFR-Projekts der Rikkyo-Universität, 2017.

久保田浩「『宗教史』の中の『宗教学』 オランダ宗教学創生期を中心に」, 日本宗教学会、2016年。

奥山史亮「20世紀初頭のイタリアとルーマニアにおける宗教研究と政治状況」, 宗教倫理学会、2016年。

江川純一「宗教史学における差異と反復 ペッタッツォーニとエリアーデ」, 日本宗教学会、2016年。

渡辺優「神秘家の『願い desir』 ミシェル・ド・セルトーに寄せて」, 日本宗教学会、2015年。

Yu Watanabe, “Lire Surin et/ou Certeau”, Colloque international. Michel de Certeau : Le voyage de l’œuvre, 2016.

Yoshihiko Abe, “Warum Idiota? – Die Rolle des Idiota im Öffnungsteil des Dialogs Idiota de sapientia”, Internationale Cusanus-Tagung 2015: Die Thematik der Weisheit in den Idiota-Schriften des Nikolaus von Kues, 2015.

Hidetaka Fukasawa, “Georg Simmel and the Paradoxes of the “Intellektuellenreligion””, XXIth International Association for the History of Religion World Congress, 2015.

Hiroshi Kubota, “Intellectuals’ Attempts to Produce and Popularize ‘Jesus of Nazareth’ in Modern Germany”, XXIth International Association for the History of Religion World Congress, 2015.

Hiroshi Kubota, “Die Produktions- und Popularisierungsstrategien eines “nationalen” Wissens: Zur “Antisemitismus”-Semantik in Artur Dinters Romantrilogie”, 3. Internationales Symposium Eberhard Karls Universität Tübingen und Rikkyo Universität: Nationale Kulturen – Nationalkulturen. Japanische und Deutsche Perspektiven, 2015.

〔図書〕(計6件)

藤原 聖子、久保田浩他、岩波書店、『世俗化後のグローバル宗教事情』、2018年、288頁。

M. Schrimpf; H. Kubota et. al., *Iudicium, Religion, Politik und Ideologie. Beiträge zu einer kritischen Kulturwissenschaft*, 2018, 405pp.

田島照久、阿部善彦、鶴岡賀雄他、教友社、『テオーシス キリスト教霊性を形づくる東方・西方教会の伝統』、2018年、556頁。

江川純一・久保田浩編、リトン、『『呪術』の呪縛(下巻)』、2017年、414頁。

渡辺優、慶応大学出版会、『ジャン＝ジョセフ・スラン 十七世紀フランス神秘主義の光芒』、2016年、466頁。

江川純一・久保田浩編、リトン、『『呪術』の呪縛(上巻)』、2015年、470頁。

6. 研究組織

(1)研究分担者

鶴岡 賀雄 (TSURUOKA, Yoshio)
南山大学・南山宗教文化研究所・研究員
研究者番号：60180056

深澤 英隆 (FUKASAWA, Hidetaka)
一橋大学・大学院社会学研究科・教授
研究者番号：30208912

前田良三 (MAEDA, Ryozo)
立教大学・文学部・教授
研究者番号：90157149

江川純一 (EGAWA, Junichi)
東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・助教
研究者番号：40636693

渡辺優 (WATANABE, Yu)
天理大学・人間学部・講師
研究者番号：40736857

阿部善彦 (ABE, Yoshihiko)
立教大学・文学部・准教授
研究者番号：40724266

(2)研究協力者

奥山 史亮 (OKUYAMA, Fumiaki) 齋藤 正樹 (SAITO, Masaki) 堀 雅彦 (HORI, Masahiko) 藁科 智恵 (WARASHINA, Chie)

Klaus Antoni, Christoph Auffarth, Beat Dietschy, Robert Horres, 崔 正和 (Choi, Jeong Hwa) Monika Schrimpf, David Weiss

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。